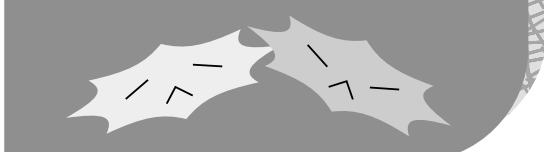


「見えないもの」へ 思いを向ける

私たちは当たり前社会生活が送れるものと
思っていないでしょうか？
気づいていますか？ 周囲の人々の努力に。



けんか



なかがわのりこ
中川紀子さん（14歳・中学

二年生）は、四月から学級委員になって、張り切った毎日を送っていました。

ある日、クラスに配る資料づくりをしていた紀子さんは、数学の授業に少し遅れてしまいました。先週も同じ授業に遅れたことがあったため、先生から少し厳しく叱られてしまいました。

その日の夕方、幼なじみで同じクラスの山下由美さんといっしょに下校した紀子さんは、叱られたくやしさをこぼしました。

「ちよつと遅れただけなのに、あんなに

きつく言わなくてもいいと思わない？」

内心、自分では授業に遅れたことを反省しながらも、紀子さんは由美さんが同情してくれるものと思っていました。

「でも紀ちゃん、授業に遅れたの、今日が初めてじゃないよね。やっぱり時間は守ったほうがいいよ」

由美さんにそう言われて、紀子さんは驚きました。由美さんは口数が少なく、人からはおとなしい感じに見られますが、結構、しつかり者です。小さいときから親しくしているので、紀子さんはよく知っていました。それでも、このことで反論されるとは思っていなかったのです。

「そういう言い方はないでしょ。私は学級委員の仕事を一生懸命やっています。遅れたんだから。由美に私の気持ちなんて分

からないわよ。だって由美は美化係じやない！」

“いけない”

紀子さんは言ってしまったあとで思いましたが、もう後の祭りです。ぼつが悪くなつて、そのまま家への道を走り出してしまいました。

夕食の時間になつても、紀子さんの気持ちはすつきりしません。それどころか落ち込んでいく一方です。

母親の昌子さん（40歳）は、そんな紀子さんのように気づいて声をかけました。紀子さんが事情を説明すると、昌子さんは、「由美ちゃんは、昔から紀子のことをよく知っているから、きつと怒つてなんかいないよ」と言つて慰めてくれました。



紀子さんは、自分もそうあつてほしいと思いつながら、気持ちを振り払うように大声をあげました。

「あーあ。私、なんであんなことを言つてしまったんだろう！」

誰もが落ちる “落とし穴”

その日、食品会社に勤める父親の義雄さん（41歳）は、いつもより早く、八時前に帰宅しました。そして食事をとりながら、昌子さんから紀子さんと由美さんのことを聞いていました。そのとき、紀子さんが二階の部屋から降りてきて、ため息をつきながらリビングに入ってきました。

「あつ、お父さん。お帰りなさい。早かったのね」

「ああ。仕事がいち段落したからね。それより、由美ちゃんとけんかしたんだって？」

「けんかじゃないわよ。ちよつと余計なことを言ってしまっただけ……」



食後のお茶を飲みながら、義雄さんは紀子さんの話を聞きました。

「なるほど。紀子にしてみれば、自分で

も悪いと思っていたのに、由美ちゃんを傷つけてしまったわけだ。それはちよつとつらいよな」

紀子さんは、自分の気持ちをお父さんに理解してもらい、うれしくなりました。台所では、昌子さんが食器を洗いながら二人の話を聞いています。

「お父さん、最近の私、本当に頑張っていたんだよ。学級委員って、思っていたよりやらなきゃいけないことがたくさんあるの。由美だって、それくらい分かってくれたっていいのに。由美は美化係だから、そんな大した仕事じゃないんだし……」

お茶を見つめていた義雄さんは、一息ついて言いました。

「紀子が頑張っていたことはよく知っているよ。お母さんが紀子の頑張りをほめていたからね。一生懸命にクラスや仲間のために努力することは素晴らしいことだと思う。けれど、一生懸命には「落とし穴」があつてね」

「えつ、落とし穴？」

「そうなんだ。大人になっても、よくおつこちる「落とし穴」なんだ」

「何よ、もつたいぶらないで言つてよ」

「簡単に言えば、一生懸命はいいんだが、それが過ぎると大事なことが見えなくなるということかな」

「ふーん……」

意味が分からない紀子さんに、義雄さんは、以前、自分が経験したことを話しました。

飛行機が飛ぶのは 誰のおかげ？

義雄さんが島根県に出張したときのことです。この島根行きの仕事は急に決まったことでした。義雄さんは事前の資料づくりや準備などを懸命に行い、羽田空港に駆けつけました。一刻も早く飛び立ちたい気持ちでした。

ところが、飛行機の整備不良が見つかったために出発は三十分も遅れてしまいました。義雄さんはイライラしながら、石見空港へ向かう飛行機へ乗り込みました。

義雄さんの席は、左の翼に近い通路側でした。隣の窓側の席には、六十代と思

われる男性が座っていて、食い入るように窓の外を見ていました。

飛行機は滑走路へと動き始めました。その男性はまだ外を眺めていました。すると、突然、男性は座ったまま外に向かって挙手の礼をしたのです。義雄さんは驚いて、男性の脇から窓の外をのぞいてみると、作業員が飛行機に向かって手を振っていました。男性は、どうやらその作業員に向かって挨拶をしていたようです。

しばらくして、義雄さんは隣の男性に



声をかけてみました。

「失礼ですが、先ほどの作業員の方はお知り合いなのですか？」

男性は、はにかんだ笑顔を浮かべながら、答えてくれました。

「ああ、驚かせてしまいましたか。実は、私は最近まで航空自衛隊で輸送機のパイロットをしていたのです。ですから、つくせで……」

「そうですか。でも、なぜ作業員の人に？」

「飛行機は、パイロットの操縦だけで飛んでいるのではなく、給油や整備をしてくれる作業員のおかげで飛ぶことができます。パイロットに比べると地上作業員





は目立ちませんが、多くの作業員のおかげで安全に飛ぶことができるのです。この飛行機だって同じです。

長年、パイロットをしていましたから、そういうことを痛感しています。ですから、今でも地上作業員には頭が下がります。特に今日のように遅れたときには、作業員は懸命に遅れを取り戻そうとします

それを聞いて、義雄さんは確かにそうだと思います。自分を振り返ってみると、悪天候の中を見事な離着陸を行うパイロットに敬意を感じたことはあっても、地上作業員のことを気にかけたことはなかったからです。

義雄さんのイライラした気分も、いつのまにか消えていました。

「当たり前」だと 見えないこと

そんなことがあつてから、
義雄さんは注意して自分の
近辺を見るようにしまし
た。すると、いろいろなこ
とに気づきました。

街を歩いていて工事現場
に出くわしたときのこと
です。

〃 通行の邪魔だなあ。なん
でこんなところを掘り返し
ているんだろう〃

今までなら、そんなふう
にしか考えませんでした。しかし、よく
考えてみると、地中にはライフライン、
つまり生活には欠かせない電気やガス・
水道などを供給する設備が埋まっている
のです。電気・ガス・水道など、使える





のが当たり前だと思っていた義雄さんは、自分たちの気づかないうちに、それらをしっかりと整備してくれている人たちがいてこそ、快適な生活ができるのだと感じたのでした。

勤務している会社でも、こんなことがありました。急用でエレ

ベーターを利用しようとしたとき、「定期点検中」の札がかかっている乗ることができなかつたのです。

「まったく、こんな急ぎのときに、なんだよ！」

義雄さんは、そう思って階段を駆け上がったところ、階上のエレベーターの前で、汗をかきながら、て

きばきと仕事をしている作業員に出会ったとき、義雄さんは思わず「ご苦労さまです。お願いします」と言っていました。

いつも、当然のように使っていたエレベーターも、こうして整備する人がいるおかげで、安全でスムーズに動いていることに気づいたからです。

また、満員電車に揺られて通勤するとき、こうやって押し合って乗っている人たちが、それぞれに自分の役割を果たそうと努力しているから、社会は全体としてスムーズに成り立っているのだと考えると、混雑の苦痛も少しはやわらぐような気持ちでした。

目には見えないけれど、私たちの生活はいろいろな人によって支えられていることに気づいてきたのです。

一人ひとりが 支え合っている

いつになく、まじめな顔
で聞いていた紀子さんが言
いました。

「なるほど。見えないところ
で、人は人に支えられて
いるのね……。私は頑張り
過ぎて、そのことが見えな
くなっていったということな
の？」

「お父さんの言いたいこと
が、よく分かったね？」

「そりゃ、そうよ。もう中

学二年生だもん！」

「もちろん、紀子がそうだと決めつける
わけじゃないけれど、美化係が大した役
割じゃないと思ってるのなら、少し違
うと思うな。そのことを言いたかったん



だ」
そこへ、食事の後かたづけがすんだ昌
子さんが声をかけました。



「私も、二人の話聞きながら、同じことを考えていたの。」

こうやって、毎日、食事の後かたづけをしているでしょう。紀子もときどき手伝つてくれるから分かった

思うけれど、
台所仕事を
やっていない
人には、その
大変さがな
なか分からな
いでしょ
う。
同じように、
私たちにはお
父さんの仕事



の大変さは分からないわ。家庭でもそうやって一人ひとりが支え合っている。家でも、学校でも、会社でも、毎日が当たり前のように過ぎていくけれど、そのために、それぞれが大事な役割を持っていると思うの。どうかしら？」

「そう言われてみれば、美化係の仕事を少し軽く見ていたかもしれない……。でも由美をバカにしていたわけじゃないよ」

「分かっているわよ。紀子、美化係の仕事を、しばらく気をつけて見てみたらどうう？ 何か気づくかもしれないわね」

そんな昌子さんの提案に、義雄さんもうなずいています。紀子さんは、もう少し自分で考えてみると言つて、部屋にもど戻つていきました。

一人ひとりが 見えてくる

二週間ほど経った日曜日のことです。義雄さんが新聞を読んでいると、紀子さんが話しかけてきました。「お父さん。これから掃除ボランティアに行ってくるね。由美に誘われたの。町のイベントで、掃除に行くに参加券がもらえて、それで出店の品物と交換できるの。公民館の広場にお店が出ているんだって」

「それはいいね。お父さんも後でのごい
てみようかな。ところで由美ちゃんとは
仲直りしたようだね」

「うん。由美に声をかけるとき、ちよつ
と勇気がいったけれどね。お母さんが





言っていたように、由美は怒ってなんか
いなかった。やっぱ、幼なじみだね。

由美って、教室や廊下のゴミをよく拾
うし、みんながいやが
る花壇の水やりもちゃ
んとやっている。美化
係が大したことないな
んで、とんでもなかった
わ。

それに、前から、誰
か教室に花を持ってき
て飾ってくれる人がい
て、いつもすぐきれ
いな。それが由美だったの。私が気づ
かなかっただけみたい。由美だけじゃな
くて、みんな結構、一生懸命に自分の係
の仕事をやっているのが分かったわ。

私、一人で頑張っているような気持ち
だったから、みんなのことがよく見えて
いなかったんだね。お父さんの言つたと
おり、私も「落とし穴」に落ちたつて感
じ！」

「そうか、それはよく気がついたな」
義雄さんは、いつもの紀子さんに戻つ
たことが、うれしく思いました。

「お父さんに教えてもらった飛行機の作
業員の話をしたら、由美も感激してい
たよ。お父さん、株を上げたね！」

そのとき玄関のチャイムが鳴りました。
「あつ、由美だ。じゃあ行つてきまーす」

そう言うと、紀子さんは家を飛び出し
て行きました。義雄さんには、玄関先で
元気にはしゃぐ紀子さんと由美さんの声
が、心地よく聞こえました。

恩恵に気づく 喜び



私たちには、ふだん見ても、「見えていない」ことがあります。

ふだんの生活が「当たり前」に送れるものと思ったり、自分は人よりも一生懸命に仕事をしていると思っていると、身近な相手や

周りの一人ひとりが持つ大切な役割や尊い努力などが見えにくくなるものです。

私たちが社会生活を送るには、意識していなくても、何らかの形で必ず他の人々から支えられています。そうした社会の恩恵に思いを向けることが、感謝と喜びのある生活を築いていく第一歩といえるのではないのでしょうか。

